

タイトル『ゴージャスお宝鑑定家』

「うーん、ゴージャス！」6』

第一幕：開幕〜依頼者登場（20分）

（剛田質店の豪華な店内。クラシック音楽が流れる中、剛田が巨大な羽根ペンで何かを書いている。白金は帳簿を確認中。）

剛田

（ペンを優雅に回しながら）「白金くん、私は今、新たな『ゴージャス十戒』を編纂しているのだよ。」

白金

（呆れて）「またですか。前の十戒、だれも覚えてないですよ。」

剛田

「だからこそ進化が必要なのだ。ゴージャスとは、止まることのない輝きのようなもの…！」

(ドアのベルが鳴り、依頼者・鶴巻が登場。派手なスーツにサングラス姿。見るからに怪しい雰囲気だが、どこか抜けている。)

鶴巻

「おお、これが噂の剛田質店か！ ゴージャスなもんしか扱わないって話、ほんとだったのか！」

剛田

(優雅に立ち上がり、深々とお辞儀)「ようこそ、ゴージャスの殿堂へ。私が店主の剛田でございます。」

白金

(小声で)「殿堂って…質屋ですよね？」

鶴巻

(得意げに)「いやあ、大物持ってきたんだよ。これ、サファイア製のバスタブだ！」

白金

(驚いて)「またバスタブ!? 今度は依頼者さんのものなんですか?」

鶴巻

「ああ、昔の知り合いから譲り受けたんだけどさ、正直、でかすぎて家に置けなくて困ってんだ。」

剛田

(目を輝かせて)「素晴らしい! だがまずは確認だ。このバスタブ、ゴージャスであるか?」

白金

(ため息)「ゴージャスではないですよ、こんなのだ。」

鶴巻

(にやりと笑って)「で、いくらになるかな?」

第二幕：鑑定と石言葉の熱弁(30分)

（剛田がバスタブをじっくり鑑定し始める。ルーペを使ったり、光を当てたりと芝居がかった動作が続く。）

剛田

「白金くん、見たまえ。この深い青。この透明感。この優美な曲線……！」

白金

（冷静に）「バスタブにしては無駄に豪華ですけどね。」

剛田

「ノン！これはただのバスタブではない。誠実、慈愛、そして成功を体現するサファイアの結晶だ！」

鶴巻

（乗っかるように）「だろ？ 見ればわかるだろ？」

白金

「いや、普通はそこまで思わないですよ。」

剛田

（深呼吸してからポーズ）「ではここで、サファイアの石言葉を語ろう。」

白金

（警戒して）「また始まった…。」

剛田

（舞台の中央に立ち、まるで講義のように）
「サファイア。それは古代より王族や聖職者に愛された石。誠実なる心を守り、慈愛をもつて人々を導く。成功の象徴として、数々の歴史に刻まれてきた！」

白金

「いや、どう考えてもこれバスタブでしょ？」

剛田

（無視して続ける）「サファイアを用いたバスタ

ブ。それは人類史上、最も誠実で慈愛に満ちた入浴を約束する！」

鶴巻

（感心して）「ほお、そういう意味があったのか！」

白金

（ぼそっと）「ないですから…。」

第三幕…実際に使ってみる&金額設定

（35分）

剛田

「だが、百聞は一見に如かず。このバスタブを使ってみなければ、真価は語れない！」

白金

「いやいや、ここ店内ですよ？ 湯をどうやって準備するんです？」

鶴巻

(冗談っぽく)「近所の銭湯から借りてこいよ！」

剛田

「ノン！ ゴージャスたるもの、源泉掛け流しの温泉水を用意するべきだ！」

(剛田が勝手に手配し、バスタブに温泉水が注がれる。)

剛田

(堂々とバスタブに浸かる)「うゝん、ゴージャス！」

白金

「何がゴージャスなんですか…。普通にお湯が気持ちいいだけでしょ？」

鶴巻

(興味津々で)「おいおい、俺も試しているか？」

剛田

「どうぞ。だがその前に…金額を決める！」

（剛田がポーズを決め、しばらく沈黙した後、口を開く。）

剛田

「このサファイア製バスタブの価値…億
円！」

鶴巻

（驚きつつも笑う）「億！？マジかよ！」

白金

「剛田さん、現実的に考えてくださいよ！サ
ファイアの相場を基にしても…」

剛田

（優雅に）「ノン！これは市場価格を超越す
る芸術品だ！」

鶴巻

(少し慌てて)「でも、さすがに2億は高すぎるだろ?」
「億くらいにしてくれないか?」

剛田

(目を細めて)「ふむ。1億円か…だがゴージャスに妥協はない。」

白金

(割って入る)「いや、そこは妥協していいんじゃないですか?」

(最終的に剛田が「1億5000万円」で承諾するが、鶴巻は分割払いを希望し、また揉める。)

最終幕…次なるゴージャスへ(5分)

(トラブルを抱えつつも、次のお宝の到着。)

配達員

「純金製のヨット、到着しましたよ。」

剛田

「よろしい。次なるゴージャスへの挑戦だ！」

白金

（涙目で）「またこれですか…。もう嫌だ…。」

（剛田のポーズを背に幕が閉じる。）